

# 問い返し疑問文に表れる「嫌」「驚き」の感情の知覚

—ロシア語を母語とする学習者を対象として—

中林律子

キーワード 感情、問い返し疑問文、アクセント型、聴取実験、ロシア語を  
母語とする日本語学習者

## 1. 研究目的

ある発話を聞いたとき、その発話にどのような意図や感情が含まれているか、その発話の母語話者であれば容易に理解できることが多い。母語の異なる話者であっても感情の知覚にはある程度普遍性があると言われているが (Ladd 1980)、非日本語母語話者が日本語音声により感情を伝達・受容する際に誤解が生じる可能性があるという報告もある (Campbell & Erickson 2004, エリクソン・昇地2006)。しかし、日本語学習者が日本語音声からどのように感情を知覚しているのかを明らかにしている研究は十分に行われているとは言えない。本研究は、ロシア語を母語とする学習者が、日本語母語話者の発話から「嫌がっている」<sup>1)</sup>あるいは「驚いている」という感情を適切に知覚できるかどうかを明らかにするものである。「嫌がっている」あるいは「驚いている」という感情を話し手が抱いていることを推測できないまま学習者が続けて働きかけを行うと、「強引な人」「鈍感な人」というネガティブな評価を受け、コミュニケーションに支障が生じる可能性がある。

「嫌がっている」あるいは「驚いている」という感情を学習者がどの程度正確に知覚できるのかを明らかにするために、本研究では、以下の例(1)(2)のような問い返し疑問文を用いる。

例(1) 「明日のパーティ、田中さんも来ますよ」

(田中さんがあまり好きではないので) 「田中さん?」

例(2) 「明日のパーティ、田中さんも来ますよ」

(田中さんが来とは思わなかったので驚いて) 「田中さん!?」

日常会話において返答として用いられることのある問い返し疑問文は、相手

の発話もしくはその一部を繰り返す（南 1985）ため、言語的情報以外の情報から相手の意図や感情を推測しなければならない。問い返し疑問文は、例(1)のように相手の発話に対して「嫌がっている」などといった否定的な感情や心的態度を表す場合に用いられたり（森山 1989）、例(2)のように相手の発話内容が意外性の高いものである場合に「驚き」を表すのに用いられたりする（近藤 2001）。従って、日本語学習者が依頼や勧誘といった働きかけを行う際には、返答として用いられた問い返し疑問文からこれらの感情を適切に知覚することが必要となる。

本研究では「嫌」「驚き」の2つの感情を変数とした問い返し疑問文を日本語母語話者とロシア語を母語とする日本語学習者に聞かせ、学習者の知覚にはどのような問題があるのかを明らかにする。

## 2. 先行研究

異なる母語話者間で、音声による感情の知覚にどのような違いがあるのかを検討した研究にはVan Bezooijen et al. (1983)、Scherer et al. (2001) がある。

Van Bezooijen et al. (1983) は、オランダ語母語話者、台湾中国語母語話者、日本語母語話者に対し、「驚き」「喜び」など10種類の感情を込めて発話したオランダ語を聞かせ、感情を同定させた。その結果、台湾中国語母語話者、日本語母語話者の正答率はオランダ語母語話者と比較して低いものの、全ての母語話者がチャンスレベル以上の確率で感情を正しく同定できることがわかった。しかし、10種類の感情のうち、オランダ語母語話者では「喜び」の感情に対する正答率が最も高かったのに対し、台湾中国語母語話者・日本語母語話者では「喜び」の感情に対する正答率が低いなど、感情によって母語話者と非母語話者の間で正答率に異なる傾向があることも指摘されている。

Scherer et al. (2001) は、ドイツ語母語話者が「怒り」「喜び」などの感情を込めて発話した無意味語文を9つの言語の母語話者に聞かせ、感情を同定させた。その結果、全ての母語話者がチャンスレベル以上の確率で感情を正しく同定しており、音声による感情の知覚にはある程度普遍性があることを明らかにしている。しかし、最も正答率の高かったドイツ語母語話者を含むヨーロッパ諸言語の母語話者の正答率が60%以上であったのに対し、インドネシア語母語話者の正答率が52%と低かったことから、母語の言語的距離が大きいほど感情の推測に違いが生じやすいことが示唆されている。

日本語母語話者による日本語音声に対して、非日本語母語話者に感情を同定

させた研究にはCampbell & Erickson (2004)、エリクソン・昇地 (2006) が挙げられる。

Campbell & Erickson (2004) は、異なる文脈で発話された日本語の間投詞「え」を用い、日本語母語話者、韓国語母語話者、アメリカ英語母語話者に自由に感情をラベリングさせた。その結果、ラベリングは母語話者間で類似していることが多かったが、アメリカ英語母語話者のラベリングで最も多かったのが「幸福」であったのに対し、韓国語母語話者のラベリングで最も多かったのが「飽き飽きした (sick-of)」であるなど、頻繁に使われるラベリングとそうでないラベリングが母語話者間で異なっていることから、このような違いがコミュニケーションに誤解を生じさせる可能性が指摘されている。

エリクソン・昇地 (2006) は、「怒り」「悲しみ」などの感情を込めて発話された一語文「バナナ」を日本語母語話者、韓国語母語話者、アメリカ英語母語話者に聞かせ、感情を同定させた。その結果、全ての母語話者が85%以上の高い確率で話者の意図した感情を同定しているが、「怒り」「驚き」「喜び」の感情を表す音声は混同されることがあり、これらの発話はF0曲線、インテンシティが類似していることを明らかにしている。

以上の先行研究から、音声による感情の知覚にはある程度の普遍性があると考えられるが、母語と異なる音声により表出された感情の知覚には問題が生じる場合もあると考えられる。感情を表出している日本語音声聞いた時に、非日本語母語話者がどのような感情は知覚が困難なのか、また、どのような音響的特徴を利用して感情を知覚しているのか等については、十分に明らかにされていないとは言えない。

西端 (1996) は、閩南語母語話者が「驚き」の感情を込めて発話した日本語の間投詞「え」が日本語母語話者には「疑い」の心的態度が表れているように聞こえる (西端他 1996) ことをふまえ、日本語学習者が音声による感情や心的態度を適切に表出・知覚するためのCAI用テキストを作成したものである。

日本語教育の現場において、音声による感情や心的態度の表出・知覚に関する指導はほとんど行われていないのが現状である。日本語教育においてより円滑なコミュニケーションを指導するため、また、効果的な教材等を開発していくために、日本語学習者が日本語音声から感情を知覚する際に何が問題となるのかを検討していく必要がある。

### 3. 日本語母語話者（JS）による判定実験

本研究では、選定した資料語を11名の日本語母語話者が4種類の意図・感情を込めて発話した問い返し疑問文を分析対象とした。実験1では日本語母語話者がどの程度これらの発話から意図・感情を判定するのかを分析し、実験2ではロシア語を母語とする日本語学習者の判定を分析する。

#### 3-1. 音声資料の収集

音声資料語は日本語学習者が初級で学習する「韓国」「毎日」（頭高型）、「現金」「片仮名」（中高型）、「カラオケ」「温泉」（平板型）の6つの4拍語とした。これらの語が4種類の意図・感情（表1）を持って発話される24のダイアログ（4種類の発話意図×6種類の語）を、対話者と音声資料提供者とで演じさせた（巻末資料参照）。ダイアログの人物設定は親しい友人同士に設定した。これは、親しくない間柄では「断り」を行う際に直接的な表現を避ける傾向があり（森山 1990）、親しい間柄の方が「嫌」等の感情が表出されやすいと考えたためである。対話者はプロの女性アナウンサー（1名）、音声資料提供者はアナウンサーや演劇、日本語教師の経験のある20代から40代の女性11名に依頼し、対話者と音声資料提供者とで24のダイアログそれぞれを最低3回演じさせた。収集した音声資料は計828例である（24のダイアログ×11名×3回＝792例に、やり直しを行った発話36例を追加）。

表1 分析対象とする意図・感情

①	意外性の低い発話に対し、単に確認を行っただけの発話	驚いていない・嫌がっていない
②	意外性が低く、望ましくない発話に対して嫌だという感情を表す発話	驚いていない・嫌がっている
③	意外性の高い発話に対して驚きを表す発話	驚いている・嫌がっていない
④	意外性が高く、望ましくない発話に対して驚き、嫌だという感情を表す発話	驚いている・嫌がっている

#### 3-2. 実験1の方法及び結果

日本語母語話者11名による発話が意図・感情を適切に表出しているのかどうかを調べるため、名古屋・東京の2箇所では20代・30代の日本語母語話者（以下JS）を対象とした判定実験を行った。<sup>2)</sup>

まず名古屋市及びその近郊で生育したJ S39名を対象とした実験を行った。828例の音声資料を話者・感情共にランダムにし、一つの音声資料につき6名が判定を行うようにするため、各判定者に127～128例の音声資料を聞かせた。判定手続きとしては、まず約128例の音声資料を2回ずつ聞かせ「驚いているか驚いていないか」を強制選択させた。その後、もう一度同じ約128例の音声資料を2回ずつ聞かせ「嫌がっているか嫌がっていないか」を強制選択させた。実験はなるべく騒音のない室内で、基本的に3名ずつで行った。説明等に要する時間を含め、実験にかかった時間は約45分である。実験の結果、「驚いているかどうか」「嫌がっているかどうか」の両方の判定が6名中5名以上一致した音声資料は332例であった。

これら332例の発話を再度ランダムにし、東京及びその近郊(千葉県、埼玉県、神奈川県を含む)で生育したJS18名を対象として再び実験を行った。一つの音声資料につき6名が判定を行うようにするため、各判定者に110～111例の音声資料を聞かせた。判定手続きは名古屋での実験と同様である。説明等に要する時間を含め、実験にかかった時間は約40分である。実験の結果、「驚いているかどうか」「嫌がっているかどうか」の両方の判定が6名中5名以上一致した音声資料は203例であった。表2は名古屋及び東京での実験で判定が6名中5名以上一致した発話を示している。

表2 JSの判定が名古屋及び東京で6名中5名以上一致した発話数

(①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」)

アクセント型	頭高型		中高型		平板型		計
語	韓国	毎日	現金	片仮名	カラオケ	温泉	
①	25	16	4	22	23	15	105
②	9	6	2	6	11	7	41
③	7	0	4	8	4	6	29
④	2	12	4	5	4	1	28
計	43	34	14	41	42	29	203

「毎日」では、名古屋・東京の2箇所でも6名中5名以上が③「驚いている・嫌がっていない」と判定した発話がなく、その他にも判定の一致した発話が少ないものがあつた。判定実験において判定者から「現金」を嫌がる場面が想像し

にくい」などの意見があったことから、判定者が語に持っているイメージが判定に影響した可能性が考えられる。

以下、本稿では、これらの発話を「JSの判定が一致した発話」とする。

#### 4. ロシア語を母語とする日本語学習者 (RS) を対象とした聴取実験

ここでは、JSの判定が一致した発話を、ロシア語を母語とする日本語学習者（以下RS）に聞かせ、(1)JSの判定とRSの判定はどの程度一致しているのか、(2)JSの判定とRSの判定が一致していない場合、RSの判定にはどのような傾向があるのかを比較分析する。また、RSの判定が一致しなかった発話にどのような傾向があるのかについても分析を行う。

##### 4-1. 実験2の方法及び結果

音声資料はJSの判定が一致した発話203例である（表2）。被験者はイルクーツク国立言語大学東洋語学部日本語学科の学生計20名（3、4年生各10名）である。<sup>3)</sup> 母語話者であるJSと比較して、非母語話者であるRSは聴覚実験による負担が大きいと考えられるため、各判定者に聞かせる音声資料を80～81例とし、一つの音声資料につき8名が判定を行うようにした。判定手続きはJSを対象とした判定実験と同様である。実験はなるべく騒音のない大学内の教室で、基本的に2名ずつで行った。説明やアンケートへの記入等に要する時間を含め、実験にかかった時間は約40分である。

表3はRSの聴取結果を示している。実験の結果、「驚いているかどうか」「嫌がっているかどうか」の両方の判定が8名中6名以上一致した音声資料は103例であった。<sup>4)</sup> 以下、本稿ではこれら103例の発話を「RSの判定が一致した発話」とする。

表3 RSの判定結果(①～④=RSの判定が一致した発話、×=RSの判定一致率が70%未満の発話)

韓国						毎日					
JSの判定						JSの判定					
		①(25)	②(9)	③(7)	④(2)			①(16)	②(6)	③(0)	④(12)
RS の 判 定	①(10)	10	0	0	0	RS の 判 定	①(12)	12	0	0	0
	②(1)	0	1	0	0		②(0)	0	0	0	0
	③(2)	0	0	2	0		③(0)	0	0	0	0
	④(6)	1	1	3	1		④(11)	0	1	0	10
	×(24)	14	7	2	1		×(11)	4	5	0	2
現金						片仮名					
JSの判定						JSの判定					
		①(4)	②(2)	③(4)	④(4)			①(22)	②(6)	③(8)	④(5)
RS の 判 定	①(2)	2	0	0	0	RS の 判 定	①(10)	10	0	0	0
	②(0)	0	0	0	0		②(0)	0	0	0	0
	③(0)	0	0	0	0		③(1)	0	0	1	0
	④(5)	0	0	1	4		④(8)	1	0	4	3
	×(7)	2	2	3	0		×(22)	11	6	3	2
カラオケ						温泉					
JSの判定						JSの判定					
		①(23)	②(11)	③(4)	④(4)			①(15)	②(7)	③(6)	④(1)
RS の 判 定	①(5)	5	0	0	0	RS の 判 定	①(5)	5	0	0	0
	②(0)	0	0	0	0		②(1)	0	1	0	0
	③(4)	4	0	0	0		③(4)	2	0	2	0
	④(9)	0	3	2	4		④(7)	1	5	1	0
	×(24)	14	8	2	0		×(12)	7	1	3	1

## 4-2. JSの判定との比較

### 4-2-1. JSと同様の回答で判定が一致した割合

表4は、RSの判定が8名中6名以上一致した発話のうち、JSと判定が同じであった発話数を示したものである。

表4 RSの判定がJSと同じ回答で一致した発話数（カッコ内はJSの判定が一致した発話数）①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」

語	韓国	毎日	現金	片仮名	カラオケ	温泉	計
①	10(25)	12(16)	2(4)	10(22)	5(23)	5(15)	44(105)
②	1(9)	0(6)	0(2)	0(6)	0(11)	1(7)	2(41)
③	2(7)	0(0)	0(4)	1(8)	0(4)	2(6)	5(29)
④	1(2)	10(12)	4(4)	3(5)	4(4)	0(1)	22(28)
計	14(43)	22(34)	6(14)	14(41)	9(42)	8(29)	73(203)

JSの判定が一致した発話203例に対し、RSの判定がJSと同じ回答で一致した発話は73例であった。先行研究においては、非母語話者はチャンスレベル以上の確率で話者の意図した感情を同定していたことが報告されているが（2章参照）、今回の聴取実験でRSがJSと同様の判定を行った割合は36.0%であった。対象とした感情や判定方法などが先行研究とは異なることを考慮しても、この数値は決して高くはなく、「毎日」の②や「現金」の③など、語や発話意図の種類によってはRSの判定が全く一致していないことがあった。

図1は、JSの判定が一致した発話に対し、RSの判定がJSと同様の回答で一致した割合を語別、アクセント型別、意図・感情別に表したものである。

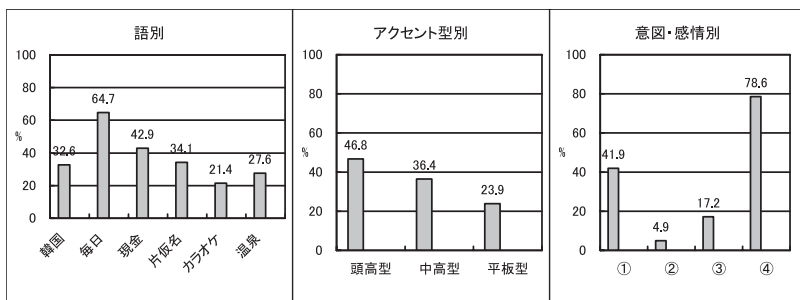


図1 RSの判定がJSと同様の回答で一致した割合(%)

①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」



語別に見ると、「毎日」はRSの判定がJSと同じ回答で一致した割合が他の語と比較して高く、60%を超えている。「毎日」は、RSが日本語の授業やJSとのコミュニケーションにおいて最も頻繁に使用する語であると予想され、そのことが「毎日」の判定に影響している可能性も考えられる。「現金」はJSを対象とした実験において判定の一致した割合が著しく低く（表2参照）、判定者が語に対して持っているイメージが判定に影響した可能性が見られたが、RSを対象とした実験においては他の語との差は見られない。このことから、非母語話者が母語と異なる語を聞く場合には、語に対して持つイメージが判定に影響する可能性が母語話者よりも低いことが考えられる。

アクセント型別に見ると、頭高型語・中高型語と比較して、平板型語においてRSの判定がJSと同じ回答で一致した割合が低い。頭高型語・中高型語が有核語であるのに対し、平板型語は無核語であることから、アクセント核の有無がRSの判定に影響している可能性が考えられる。

意図・感情別に見ると、RSの判定がJSと同じ回答で一致した割合は④においては約80%に及んでいるが、②、③においては顕著に低い。このことから、RSにとっては、「驚いている」「嫌がっている」両方の感情が込められた発話から「驚いている」「嫌がっている」両方の感情を知覚することは比較的容易であるが、「驚いている」「嫌がっている」のうちどちらか一方のみの感情を正しく知覚することは困難であると考えられ、特に「嫌がっている」という感情を知覚する難しさが伺われる。

#### 4-2-2. JSと異なる回答で判定が一致した割合

RSの判定が8名中6名以上一致した発話の中には、JSと判定が同じであった発話だけでなく、JSと判定が異なっているものもあった。RSの判定がJSと異なる回答で一致した発話をまとめたところ、RSの誤りには以下の4つのパターンがあった。

- (a) JSが①「驚いていない・嫌がっていない」と判定した発話に対し、RSが④「驚いている・嫌がっている」と判定してしまう。
- (b) JSが②「驚いていない・嫌がっている」と判定した発話に対し、RSが④「驚いている・嫌がっている」と判定してしまう。
- (c) JSが③「驚いている・嫌がっていない」と判定した発話に対し、RSが④「驚いている・嫌がっている」と判定してしまう。
- (d) JSが①「驚いていない・嫌がっていない」と判定した発話に対し、RSが③「驚いている・嫌がっていない」と判定してしまう。

これらのパターンから、RSは、JSが「驚いている」または「嫌がっている」と判定した発話に対して「驚いていない」または「嫌がっていない」と判定する可能性は低い、反対にJSが「驚いていない」または「嫌がっていない」と判定した発話に対して「驚いている」または「嫌がっている」と判定する可能性があると考えられる。表5は、RSの判定がJSと異なる回答で一致した発話が何例生じたかを表している。

表5 RSの判定がJSと異なる回答で一致した発話数

(①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」

	韓国	毎日	現金	片仮名	カラオケ	温泉	計
( a )JS①→RS④	1	0	0	1	0	1	3
( b )JS②→RS④	1	1	0	0	3	5	10
( c )JS③→RS④	3	0	1	4	2	1	11
( d )JS①→RS③	0	0	0	0	4	2	6
計	5	1	1	5	9	9	30
アクセント 型別計	6		6		18		

JSの判定が一致した発話203例に対し、RSの判定がJSと異なる回答で一致した発話は30例で、全体の14.8%を占めている。

(a)～(d)それぞれの合計を見ると、(b)、(c)のパターンが多いことが目立つ。RSの判定が正しく一致した割合は、「驚いている」または「嫌がっている」感情のうちどちらか一方のみを表している発話(②、③)に対して顕著に低かった(4-2-1)。これらのことから、RSは「驚いている」または「嫌がっている」どちらか一方の感情のみを表している発話を聞いた際にどちらか一方の感情だけを正しく知覚することが難しく、「驚いている」「嫌がっている」両方の感情が表われていると判定してしまう傾向があると考えられる。RSがこのような判定を行ったことは、必ずしも「驚いている」「嫌がっている」両方の感情をRSが知覚したことを表しているのではなく、RSが「何らかの感情が表れている」という判断のみによって判定を行ったことを表しているとも考えられる。

語別の合計を見ると、同じアクセント型であっても、頭高型語では「毎日」よりも「韓国」のほうが、中高型語では「現金」よりも「片仮名」のほうがJSと異なる回答で判定が一致した発話が多い。「韓国」、「片仮名」では、共に(c)

での発話の多さが目立つが、このことが発話の音響的特徴によるものなのか、または音節構造や学習者にとっての定着度などによるものなのかは現時点では判断が難しい。

アクセント型別の合計を見ると、無核語である平板型語において、JSと異なる回答で判定が一致した発話が目立つ。有核語である頭高型語・中高型語と比較すると、平板型語では(b)、(d)のパターンが多い。(b)(d)は共にJSが「驚いていない」と判定した発話を「驚いている」と判定したことにより生じるパターンである。このことは、JSが「驚いていない」と知覚する発話であってもRSが「驚いている」と知覚してしまう可能性が、有核語に比べ無核語のほうが高いことを示唆している。これは、アクセント核による下降がない場合、RSはピッチの変動が大きいのかどうかを判断しにくいためであると考えられる。

#### 4-2-3. RSの判定が一致しなかった割合

表6はRSの判定が一致しなかった発話（判定一致が8名中5名以下）を表している。

表6 RSの判定が一致しなかった発話数（カッコ内はJSの判定が一致した発話数）

(①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」

語	韓国	毎日	現金	片仮名	カラオケ	温泉	計
①	14(25)	4(16)	2(4)	11(22)	14(23)	7(15)	52(105)
②	7(9)	5(6)	2(2)	6(6)	8(11)	1(7)	29(41)
③	2(7)	0(0)	3(4)	3(8)	2(4)	3(6)	13(29)
④	1(2)	2(12)	0(4)	2(5)	0(4)	1(1)	6(28)
計	24(43)	11(34)	7(14)	22(41)	24(42)	12(29)	100(203)

JSの判定が一致した発話203例に対し、RSの判定が一致しなかった発話は100例で、全体の49.2%を占めている。

図2は、JSの判定が一致した発話に対し、RSの判定が一致しなかった割合を語別、アクセント型別、意図・感情別に表したものである。

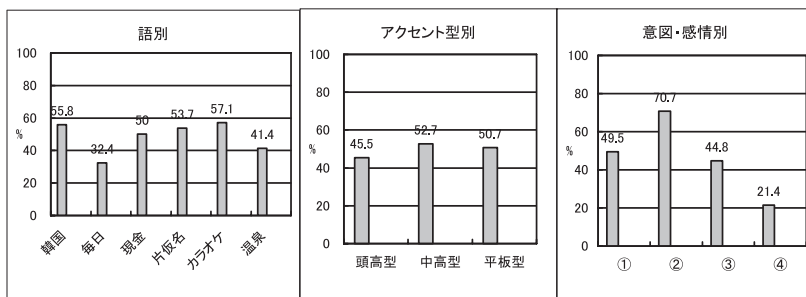


図2 RSの判定が一致しなかった割合 (%)

(①「驚いていない・嫌がっていない」、②「驚いていない・嫌がっている」、③「驚いている・嫌がっていない」、④「驚いている・嫌がっている」)

語別に見ると、判定が一致しなかった発話は「毎日」以外の語においては50%前後見られるが、RSの判定がJSと同じ回答で一致した割合の多かった「毎日」においては約30%にとどまっている。他の語においては「温泉」で41.4%と判定の一致しなかった割合がやや低い、他の語では55%前後で大きな差はなく、音節構造の違いによる影響は明らかではなかった。

アクセント型別に見ると、中高型語において判定が一致しなかった割合がやや高いが、頭高型語・平板型語と比較してそれほど目立った差ではないように思われる。平板型語では、他のアクセント型の語と比較してRSの判定がJSと同じ回答で一致した割合が低かったが(図1参照)、判定が一致しなかった割合については他のアクセント型の語との差はほとんど見られない。このことは、平板型語においてはJSと異なる回答で判定が一致した発話が多かったことを示している。

意図・感情別に見ると、RSの判定がJSと同じ回答で一致している割合が高かった④においては判定が一致しなかった割合も低く、反対にRSの判定が正しく一致している割合が少なかった②においては判定が一致しなかった割合が高い。①と③では判定が一致しなかった発話が共に40%強を占めているが、RSの判定が正しく一致している割合は③の方が低いことから(図1参照)、RSが③の発話においてJSの判定と異なる回答で判定が一致した割合が多かったことがわかる。

## 5. まとめと考察

JSが①「驚いていない・嫌がっていない」と判定した発話に対しては、RSの判定はJ Sの判定と異なった回答で一致するケースは少なかったが、JSと同じ回答で一致した割合と、判定が一致しなかった割合とが半々であった。先行研究においては母語の音声かどうかに関わらず中立発話に対する同定率は最も高いという報告があるが（Scherer et al. 2001, Van Bezooijen et al. 1983）、本実験の結果からは、RSにとって特定の感情を表していない日本語音声から「（話し手は）特定の感情を持っていない」ことを理解することが必ずしも容易ではない可能性が考えられる。

JSが②「驚いていない・嫌がっている」と判定した発話に対しては、RSの判定が一致しない発話が80%近くを占め、RSの判定が一致した場合でも④「驚いている・嫌がっている」と判定してしまうケースが目立った。そのため、RSの判定がJSと同じ回答で一致した割合は際立って少なかった。同様に、JSが③「驚いている・嫌がっていない」と判定した発話に対しても、RSの判定がJSと同じ回答で一致した割合は低かった。RSの判定が一致しなかった割合は②「驚いていない・嫌がっている」ほどは多くなかったが、②と同様に④「驚いている・嫌がっている」と判定してしまうケースが目立った。「嫌がっている」「驚いている」感情のみを表している発話に対し、「嫌がっている」「驚いている」両方の感情が表れていると判定していたことは、RSがこれらの発話から両方の感情を知覚していたというよりも、むしろ、感情の区別が難しく、「何らかの感情が表れている」という判断によってのみ判定を行っていたことによるのではないと思われる。

JSが④「驚いている・嫌がっている」と判定した発話に対しては、RSは高い割合でJSと同じ回答で判定が一致していた。しかし、④の発話は「驚いている」「嫌がっている」両方の感情の音響的特徴を有していることから、RSにとっては①「驚いていない・嫌がっていない」との区別がつけやすかったと考えられ、RSが感情の種類に関わらず「何らかの感情が表出されている」という判断により判定を行っていた可能性も否定できない。

RSの判定を語の種類別に見ると、「毎日」において正しく判定が一致している割合が目立って多く、語の使用頻度や定着度の影響が考えられるが、これらの要因がどの程度感情の知覚に影響するのかについては今後の課題としたい。

RSの判定をアクセント型別に見ると、無核語である平板型語においてJSと異なった回答で判定が一致していた割合が多く、特に、JSが「驚いていない」と

判定した発話を「驚いている」と判定してしまうケースが目立った。このことは、RSにとってはアクセント核のない発話から「驚いているかどうか」を正しく知覚することが困難である可能性を示唆している。

本研究では、RSが感情を表出している日本語音声聞いた際に、感情の種類やアクセント型などによっては正しく感情を知覚することが困難である可能性が示された。今後、他の母語話者の知覚についても検討し、日本語学習者が日本語音声から感情を知覚する際に何が問題となるのかを明らかにしていきたい。

## 注

- 1) 人がある対象にどのような感情を抱くかは、その対象をどのように評価するかにより決定する(コーネリアス1999)。土田(1996)は、感情は対象に対し望ましいと思う「快感情」と、望ましくないと思う「不快感情」に大別され、「好きだ」などの正の評価を表す言語表現は「その対象を受容し、それに接近していく」という心理状態を、「嫌いだ」などの負の評価を表す言語表現は「その評価の対象を拒否し、回避する」という心理状態を表すとしている。本研究では「嫌」という感情を「相手からの働きかけの内容が自分にとって望ましくないため、拒否・回避したい」と感じる感情とした。
- 2) 本来ならば東京1箇所のみで実験を行うべきであるが、本研究者が東京近郊在住でないことから、時間的・人数的に東京のみで実験を行うのが困難であった。そのため、本研究者の在住地に近い名古屋及びその近郊で第1回の判定実験を行い、意図・感情が適切に表されている発話を選定した後、改めて東京及びその近郊で実験を行った。
- 3) ロシア語を母語とする日本語学習者20名は、日本語能力試験3級程度の日本語能力を有している。
- 4) 一致した資料数は日本語母語話者では6名中5名以上(83.3%以上)が一致した場合とし、ロシア語母語話者では8名中6名以上(75.0%以上)が一致した場合とした。どの程度の一致率があれば意図が十分に表明されている発話であると考えられるのかは難しいが、両言語の母語話者共に最低70%以上を基準として一致率を設定した。

## 参考文献

- Campbell, N. and D. Erickson (2004) “What do People Hear? A Study of the Perception of Non-verbal Affection Information in Conversational Speech,” 『音声研究』第8巻第1号, pp.9-28.
- コーネリアス, ランドルフ・R (1999) 『感情の科学—心理学は感情をどこまで理解できたか』 齋藤勇監訳, 誠心書房
- エリクソン, ドナ・昇地崇明 (2006) 「性差、および母語が感情音声の知覚に与える影響—日本語、韓国語、英語母語話者を対象として—」 音声文法研究会編『文法と音声V』 くろしお出版, pp.31-46.
- 近藤研至 (2001) 「「意外である」ということと「問い返し疑問文」について」 『言語と文化』第14号, 文教大学言語文化研究所, pp.16-27.
- Ladd, D. R. (1980) *The Structure of Intonational Meaning : Evidence from English*, Indiana U. P., Bloomington, IN.
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店, pp.39-74.
- 森山卓郎 (1989) 「内容判断の一貫性の原則」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』 くろしお出版, pp.75-94.
- 森山卓郎 (1990) 「『断り』の方略—対人関係調整とコミュニケーション」『言語』第19巻第8号, pp.13-30.
- 西端千香子 (1996) 「感情・態度を持つ音声の知覚・表出訓練のためのCAI用テキストの作成—促音が含まれる発話を中心に—」『感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究』平成7年度科学研究費補助金〔一般研究(B)研究成果報告書〕, pp.99-116.
- 西端千香子・浅田健太朗・篠崎大司・徐愛紅・刃田美有紀・細田和雄 (1996) 「「ア」と「エ」で表出される感情の韻律的特徴—閩南語母語話者の場合—」『感情・態度を表す日本語音声の表出診断・訓練プログラムの構築に関する研究』平成7年度科学研究費補助金〔一般研究(B)研究成果報告書〕, pp.21-40.
- Scherer, K. R., R. Banse, and H. G. Wallbott (2001) “Emotion inferences from vocal expression correlate across languages and cultures,” *Journal of Cross-Cultural Psychology* 32(1), pp.76-92.
- 土田昭司 (1996) 「感情の社会的判断—意思決定と態度構造」 土田昭司・竹林和

久編『対人行動学研究シリーズ4 感情と行動・認知・生理—感情の社会心理学』誠信書房, pp.103–126.

Van Bezooijen, R., S. A. Otto, and T. A. Heenan (1983) “Recognition of vocal expressions of emotion: A three-nation study to identify universal characteristics,” *Journal of Cross-Cultural Psychology* 14(4), pp.387–406.

資料 音声資料収集に用いたダイアログ（「韓国」の一部）

①「驚いていない・嫌がっていない」

あなたは友達と夏休みの海外旅行の行き先について話しています。二人ともヨーロッパへ旅行するつもりでしたが、友達は韓国もいいのではないかと提案してきます。確かに、韓国旅行は安く済むし、今人気もあるので、あなたは韓国へ行くのも悪くないと思います。

友達：ヨーロッパもいいけど、韓国へも行ってみたいと思わない？

あなた：韓国？それもいいね。

④「驚いている・嫌がっている」

友達が突然、来週末に韓国へ行かないかと誘ってきました。あなたは急な提案にとっても驚いたし、今から旅行の準備をするのは大変そうだし、韓国にもあまり興味がないので友達の誘いを断りたいと思います。

友達：来週の週末、空いてる？

あなた：うん、空いてるけど。

友達：一緒に韓国に行かない？

あなた：(あまりに急な話なので驚いたし、準備も大変そうだから行きたくないと思って)  
韓国！？

友達：うん、一緒に行くはずの子が、急に行けなくなっちゃって。無理？

あなた：うーん。ちょっと急すぎるから・・・。